

第三九号



1993

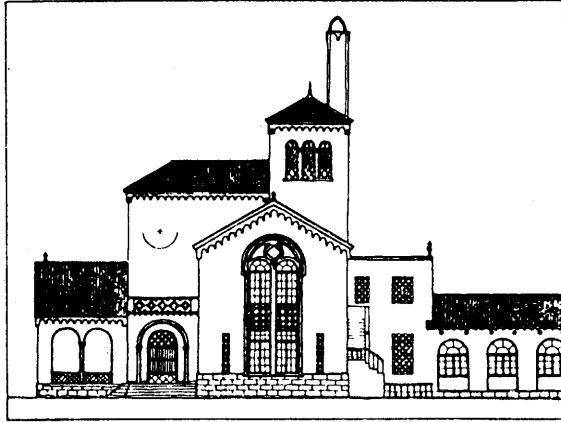
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第三九号

1992年1月——1992年12月

も く じ



随想

Jiefang..... 荒井 健

私と考古学..... 安 志敏

古典芸能の奇妙な特質について..... 藤田 隆則

講演

夏期講座

群集が動くときーフランス革命祭典への道(阪上) / 紫禁城のドルゴンー征服王朝の正統性(谷井) / 王道楽土を行くー「満州国」往還(山室) / 中国の近代化と越境現象(森) / 漂流する小説ー「ロビンソン・クルーソー」の越境(齋藤) / シンポジウム「越境する人びと」(横山)

開所記念講演

自作を語る作家たちー創作法の公開について(鈴木) / 端方と二枚の写真(浅原) / 公卿の拳兵と草莽ー赤報隊の結成などをめぐって(佐々木)

集報

おくりもの(21) 訃報(21) 人のうごき(21) 外国人研究員(23) 招へい外国人学者(23) 外国人研修員(23) 外国人研究生(23) 東洋学文献センター講習会(24) 講演会(25) お客さま(25)

共同研究の課題

「居所」確定の効果ー「居所」班..... 藤井 讓治

旅

一九二〇年代の中国と中国近代史研究..... 石川 慎浩

上海の秋蟹

たかが文学、されど文学..... 大浦 康介

ある街路の話

理髪..... 山室 信一

書いたもの一覧

おもしろく読んだ本..... 富永 至

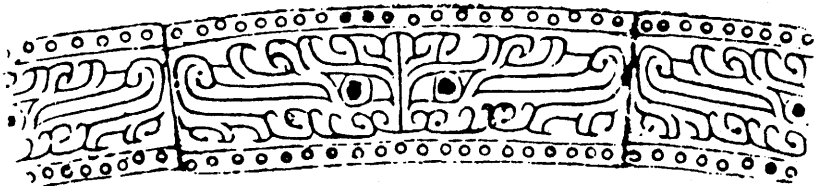
Jiefang

荒井 健

jiefangとはなにか。日本語ではカイホウ、漢字で書けば解放。そう、かの中国人民解放軍の解放である。

今年の三月で停年退職だが、せんだって、やめるのはどんな感じですかと中文の学生にたずねられて、そりゃもうjiefang、jiefangだよと言ったら、むしろげんな顔をされて、今度はこちらが少しばかりふうんと思った。公務員の年季があけてやめさせていただくのは、やはり解放以外の何物でもないはずなのに、そう答えていぶかしがられたのは、わたしがいかにのんびりしているかに見えただけのことであろう。むかし川勝（義雄）さんが、このごろ忙がしくて困ってるのにいくら忙がしい忙がしいと言うても相手は本気にしてくれよらん、とほやいてられたのを思い出す。

はためにはどうだろうと、私がjiefangと感じているのはなぜか。これの理由は至って簡単。やりたいことはあまりなく、やりたくないことはいくらでもあるせいだ。たとえばこの文章、わずか二枚か三枚ですからということで強いて引き受けはしたが、なんでこんなものを書かねばならぬかと、うっとしいのは

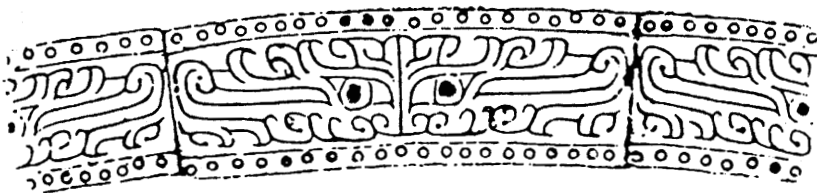


事実だ。世間にはどうでもいい文章が氾濫している。その上わたしまでがなんでこんなものをだ。

保田與重郎という人物は、人が三枚で書くところを三百枚に引きのばす能力を持っていたそうだ。話半分で百五十枚、いやいやたとえ三十枚にしても実にうらやましい。こちらは逆で三十枚を三枚に縮める方なら少しは能力を持っているかもしれないが、わずか二枚か三枚に四苦八苦だ。

わたしはまた大学教師の端くれでありながら講義講演が大きらいという不心得者で、退官講義なるものには今からおぞけをふるう始末で、しかしこれを断るとなると相当なエネルギーを要するのは確実だ。この原稿を断るところの話ではなからう。それならいっそ黙って一席ぶつにしかず。ということになる。

大学紛争ないし闘争、のころが停年のめぐりあわせの先生方は、幸か不幸か退官講義をされなかった。いや、されたくともお出来にならなかった。わたしの言いぐさなどバチが当りそうだ。でも、国立大学勤務の教員は必ず退官講義をやるべしなのか。公務員の身分法とか大学の内規とかでは一体どうなってるのだらう。まさかこれをやらねば永遠にjiefangしてやらぬぞというのでもあるまいが。



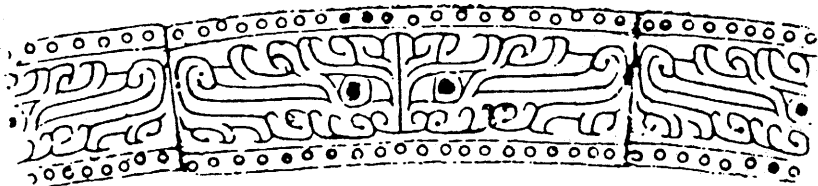
私と考古学

安 志敏

私が考古学の勉強を始めてからもう五十年になります。学生時代に中国考古学の先輩である裴文中、梁思永、夏鼐の諸先生からいろいろの教えを受けて、更に中国社会科学学院考古研究所で先史時代の調査を中心として一生懸命働きました。その中で日本考古学の先輩とも深いつながりに結ばれ、影響を受けました。

高校生のころ浜田耕作博士の『考古学入門』（創元社、一九四一）を読む機会があり、考古学に対する興味を募らせました。これを中国語に翻訳しながら読み、考古学の基礎知識を勉強したのでした。この本によって私が考古学の道に導かれたことはほんとうにありがたかったとおもいます。このたび人文研の客員教授として法然院に行き、先生のお墓にお参りすることができました。懐かしさと同時に深い感銘があります。

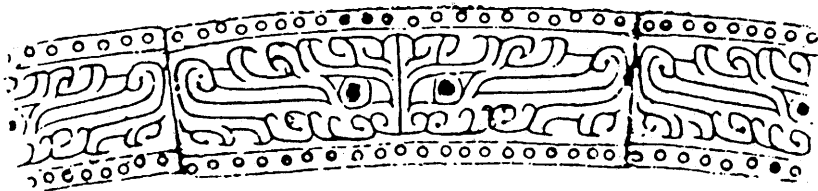
日本の考古学者とはじめてお会いしたのは、鳥居龍藏博士でした。それは日中戦争が終結して間もなくのこと、わたしは二十代のおわり、先生は燕京大学の客員教授で、考古学の研究を続行しておられました。大学二年生の私は、燕京大学のある先生の紹介で、鳥居先生に教えを請うことになりました。初対面



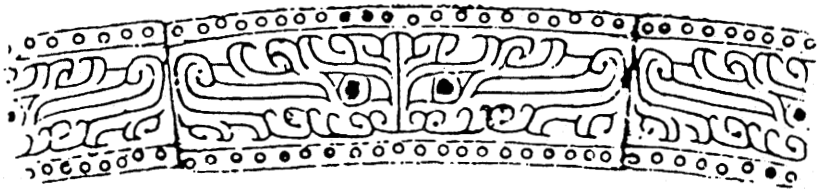
の時、先生は親切に私を迎えてくださり、温かい激励を受けました。それからと言うもの、ほぼ毎週の日曜日、私は自転車に乗って、北京城内から十数キロ離れた先生のお宅へ伺い、教えを請うことになりました。一九四八年から五十年までの間、私は燕京大学歴史系の助手でした。この間、先生にお会いする機会はますます多くなり、先生が中国語で発表なさる論文の原稿を一部は翻訳したりしてお手伝いをしました。これも懐かしく思い出されます。一九五一年の末、先生が帰国なさったとき、私はちょうど湖南省の長沙で発掘中で、先生に直接お別れの挨拶をすることが叶いませんでした。これはかえすがえすも残念でしたが、ようやく一九九〇年になって徳島の先生のお墓にお参りができました。こういう形で先生に再会したわけですが、三十九年ぶりのことでした。鳥居先生は私の恩師の一人です。現在日本で先生の薫陶を受けた方はほとんどおられませんので、北京にて先生とご縁があったことは私にとって非常に大切なものとなっております。

一九五七年、原田淑人博士を団長として日本考古学代表团が新中国を訪問しました。これは、日中考古学交流の転機といわれ、交流はそれから一層盛んになりました。西安と北京で原田先生は「長安所感」、杉原莊介先生は「日本農耕文化の形成」の講演をなさいましたが、わたしがその通訳の任にあてられました。

一九八〇年以降、私の日本訪問はもうこれで九度目になります。



した。日本に所蔵される中国考古学資料を調べるばかりでなく、日本考古学自身からも有益な啓発を受けて、弥生文化に特に興味を持つことになりました。嘗てある日本のシンポジウムの席上、稲作農耕、環濠集落、高床式建築、墳丘墓などの源流は江南地方に求めるべきという視点を提出したことがあります。これは私の日本考古学に関する始まりであり、人文研生活をきっかけに今後とも一層この方面について勉強したいと思っています。



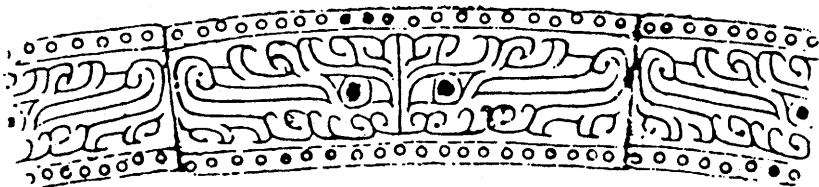
古典芸能の奇妙な特質について

藤田隆則

古典芸能というのは現代がつくりあげたまことに奇妙な一芸能ジャンルだといってよからう。そもそも芸能なるものの最大の特質は、今ここにおける一回性（あるいは当座性）という点にあり、より刺激のつよい方向へと日々革新され、それでものたりなくなってしまうば、まるごと葬りさるというかたちで人びとがそれを革新してゆくという点にある。そのような性質のものを、「古典」というまったく矛盾する方向性をもった言葉で形容すること自体が奇妙なことと思われるのだ。

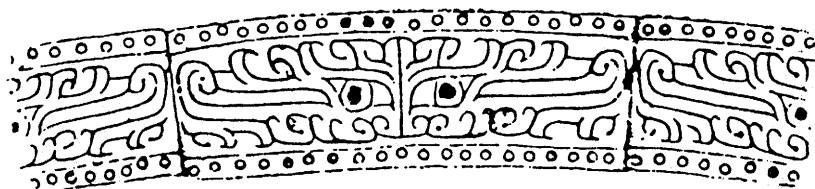
しかしながら芸能には別の一面がある。カラオケが流行しているここ数年は、とくにその傾向が社会全体でつよく前面に押し出されていると思われるのだが、人びとが芸能にもとめるのは「以前と同じことがここでもう一度繰り返し返される」ということである。「リクエスト」「アンコール」という言葉が投げかけられれば、芸人はそれに答えなければならぬ。同じ歌を昔のように歌わなければならぬのである。

より小さな単位にも目を向けてみよう。芸能のテキスト（たとえば歌の歌詞など）にはかならずリフレイン（繰り返し部分）があるものだが、それはなぜ、何のためにあるのだろうか。リ



フレインは歌手がしばし息抜きをする部分として必要不可欠、といった実情に即した説明もできるし、歌手がバリエーションを次々につくるための素材あるいは道具になっているという風に、機能に焦点をあてて説明することもできる。どの説明も観察可能で正しいことを認めた上でつけ加えておきたいのは、「同じことの繰り返しをもとめる」という観客の期待が、フレインのおこなわれる背景にかならずあるということだ。歌手が歌にリフレインを組み込むことは、その期待への忠実な返答である。歌のリフレインは、観客を巻き込んだ合唱のかたちで演じられることがしばしばあるが、観客の知っていることがそこで同じように繰り返されるからこそ、そのような形式も可能なのであろう。

古典芸能とは、世間の多くの人たちが芸能へのそういった参加から、すこしづつ距離をおくようになったあとでも、権力や制度という外部の力によって、「リフレイン」的なものが執拗に演じられるという現象なのである。ある人びとにとっては、あまりにも無駄で非合理的なことが強要されているとしかうたらない現象だ。だが、別の人びとにとっては、場の中で観客のもとめに応じて自発的に生じたリフレインよりもさらによい効力、今ここではない過去や別の世界を今ここに強く織りこむ力をもつことになる。このからくりをどのように説明したらよいのか、私にはいまもって言葉がみつからない。



講演



夏期講座（一九九二年度）

七月十日―十一日
於 本館会議室

統一テーマ 越境する人びと

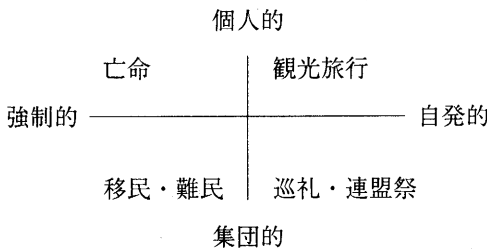
群集が動くとき

―フランス革命祭典への道

阪 上 孝

さまざまな境界があり、さまざまな越境がある。地方や国のあいだ、身分や階級のあいだ、聖と俗のあいだなどの境界があり、それらを越える越境がある。私たちの日常生活が差異の体系に境界によって編成されることで成り立っているとすれば、越境は慣れ親しんできた差異の体系の外部に出て異なった世界に出会うことによって、越境した人々にはもちろんのこと、社

会にも活力を回復させたり、新たな生き方やあり方もたらず契機となるであろう。
今年の講座の主題は空間的な越境だが、かりに強いられた越境―自発的な越境と個人的な越境―集団的な越境という二つの座標軸をとると、つぎのように類型化できるだろう。



一八世紀のフランスは前世紀にくらべて、空間的移動のきわだった時代だった。ルソーやモンテスキューのような知識人たちのヨーロッパを駆けめぐる大旅行、

旅行案内や旅行記の相次ぐ出版。生活難から職を求めて都市に向かう大量の貧しい農民。これらの越境は習俗や価値の相対性を認識し、あるいは「社会問題」を告知する母胎となったが、想像上ではあれ国民という共同性を生み出す契機となったのは、フランス革命の際の「連盟祭」——自発的で集団的な越境——であった。

バスチーユ攻撃の直後に、貴族に指揮された野盗団が村を襲ってくるという風聞が広まり、フランス全土がパニック状態に陥る。この危機に対応するために自警団（国民衛兵）が組織され、さらに居住地域を越えて共同で防衛にあたらうという運動が芽生える。この運動は革命一周年を記念する全国連盟祭で頂点に達する。連盟祭に参加するために、自発的に各地からパリに向かう人々で道はおおわれる。連盟祭は差異の体系によって編成された日常生活を脱して、より大きな共同体の一員として活動し共感しあう、世俗的な巡礼ともいべきものだった。それは平等や連帯の実感の場であり、国民という「想像の共同体」の誕生の場面だった。連盟祭に参加することで、人々は身分や地方の境界を越えたが、それは同時に国民と国民でないものあいだの境界線を強化することにつながった。ジャン・ジョレスがいうように「祭典の魅力とすべての人々を

とらえた喜びのなかに、将来、重大な結果をもたらすにちがいない、無秩序と不信と暴力の根強い原因」があったのであり、今日問われているのは、この国民国家という境界をいかに越えるかという問題であろう。



紫禁城のドルゴン

— 征服王朝の正統性 —

谷 井 陽 子

清朝の中国支配は、一六四四年の入関を機に瞬く間に成立した。しかもこの間、満州人の大移動と政治的変革にもかかわらず、民族的葛藤は比較的めだたない。もともと清朝は、天命と中原の民の支持を中国支配の正統性の根拠とした関係上、政策的にもことさらに民族差別をしない方針をとっていたこと、基本的に明の体制をそっくり踏襲したことなどがその理由として挙げられるが、こうした態度にはそれなりの基盤が考えられる。

当時の満州人には、民族の別は単なる風俗習慣の違いとして以上に意識された形跡はなく、世界観・価値観の違いは意外なほど表面に現れない。彼らは漢人のにせよ満州独自のにせよ、特定の伝統に則るのではなく、もっと普遍的な規範に則っているつもりであったが、それらは伝統的な漢文化の分脈で十分に説明可能なものであった。従って自らの伝統の普遍性を確信する漢人とも原理的な問題で齟齬をきたすことはほとんどない。これは両者の間に文化的対立が存在しなかつ

たということではない。原則的な点では一致していても、具体的な事項に則してもっている概念の相違が大きな影響を及ぼすことがあるからである。これはたとえば、皇帝が具体的にどのような政治的役割を果たすか、明代に著しい発達を遂げた言官の具体的な活動形態がいかにあるべきか、などといった問題について現れる。これらは結果的にこれまでにない皇帝独裁制の強化をもたらすが、もとより漢人の政治的伝統への挑戦と考えられて行われたわけではなく、当局者にはせいぜい明末の一時的な悪習の改善程度にしか認識されていなかった。逆に満州人が具体的なイメージをもたない、あるいはイメージが希薄な多くの事柄については漢人のそれがほとんど無頓着に取り入れられた。

満州人の入関は、物理的には華々しい越境であったが、ものの考え方の上でも越境があったとは言えないようである。境界がなかったわけではないにもかかわらず、その存在を明確に認識していた形跡がない。このことが結果的には、自らを中国の中に解消して、中国的な普遍性を再生・強化し、近代に至っても根強く有効性を保つ、その根強さの一端を形成する所以ともなったと考えられる。

王道楽土を行く

——「満州国」往還——

山室信一

一九三二年三月、中国の東北地方に建国された「満州国」は五族協和、順天安民をスローガンに掲げ、ここに地上の理想境を築くことを標榜した。もちろん、そこは中国の主権下であり、「満州国」が国家としての正当性を持ちえない偽国＝傀儡国家にすぎなかったことはいうまでもない。

しかし、満州の曠野が日本の民衆にとって日清、日露そして満州事変の三次にわたる戦いによって血で贖われた聖地として、日本で満たされない希望を叶えてくれる約束の土地とみなされたこともまた否定できない。そして「国境の町」「国境を越えて」「満州しぐれ」「北満だより」などの流行歌にみられるように「満州国」の出現によって日本人は陸地における国境を史上初めて意識するに至ったようにも思料されるのである。しかし、同時に法的には明らかに外国であるはずの「満州国」がそこに移り住んだ日本人にとつてあくまで内地の延長以上のもとなりえなかつたことも事実である。分村・分郷移民をはじめとして、

「満州国」に作られたのはあくまで第二のムラであつて、五族協和の国家で各民族はほとんど相交わることなく棲み分けていた。いや、国策にしたがつて移り住んだ人々の土地や田畑は、そこに生きていた人々が多年にわたつて切り拓いてきたものであり、奪つた者と奪われた者とが共存できるはずもなかつたのである。

かくて「満州国」は他国の領土に国家を作つたという点でも、また、およそ一五五万人におよぶという量の点でも、日本史上空前の、そしておそらく絶後の越境現象であつた。しかし、日本および日本人は、この越境によつて国際的にも、また「満州国」内でも孤立を余儀なくされた。五族協和の楽土への越境は、異民族や異文化との接触によつて常識をくつがえし、感性を刺激して新たな文化や社会を形成していくための契機とはついになりえなかつたのである。

そして、一九四五年八月、ソ連の対日参戦により「満州国」は終焉を迎え、このときから在満日本人の潰走と苦難がはじまる。人々はひたすら国境を越えて日本へ引き揚げることを願つた。逆説的にいえば、この時ほど越境が全生をかけて切望されたこともないであらう。

しかし、真に日本人が越えるべきであつた境とは国のそれではなく、心の境であつたとはいえないであら

うか。

越境は必ずしも人と人との繋がりをもたらすものではなく、むしろ拒絶と孤独そして憎悪さえもたらすものであることを「満州国」往還の歴史は今もなお物語っている。

中国の近代化と越境現象

森 時 彦

中国近代にみられる比較的顕著な越境現象は、労働力輸出と海外留学に大別するのが適當であろう。

前者の例としては、一八四〇―一七〇年の「猪仔貿易」や第一次世界大戦期の「参戦華工」などをあげることが出来る。いずれも、一八三三年イギリスでの奴隷貿易禁止あるいは第一次大戦にもなうフランス等での労働力不足といったヨーロッパの事情に起因するもので、いわば迫られた受動的な越境現象であったが、三十万人から五十万人もの数の移動であっただけに、東南アジアの華僑社会やアメリカのチャイナタウンなど、世界各地にいまもその痕跡をとどめているばかりでなく、中国の貿易収支の入超を補って余りあるほどの巨額な華僑送金をはじめ、その資金力は中国経済の行方を左右する役割を果たしてきた。

これに対して後者は、ウエスタンインパクトによる亡国の危機意識から中国社会の近代化をめざした自主的、能動的な越境であった。一九〇五年を中心とする日本留学、一九二〇年をピークとするフランス留学、



どちらもその数こそ八千人と二千人と、前者とは二桁も違う数字であるが、アジアで最初の共和国を樹立した一九一一年の辛亥革命、現在の中華人民共和国が成立した一九四九年の解放とともに、これらの海外留学が一つの淵源をなしている。

講演では後者に焦点をあわせて、四川省出身のフランス留学生、劉子華氏の足跡を追いつながら、中国近代における留学の意味を考えてみた。劉氏は一九二〇年に勤工儉学生として渡仏し、二十年あまりの苦節の末、四三年に「八卦宇宙論と現代天文——最後の新惑星木王星の存在予測」と題する論文でパリ大学から博士号を授与された。易の八卦の原理を運用して惑星の公転速度と質量から第十惑星、木王星の存在を予測したこの論文に対し、審査にあたった道教学者のマスペロは、「中国古代の聖人は宇宙の秘密をすでに知っていた」という一句を結論にくわえることを条件に学位を認めたとという。

中国古代の智慧にもとづいて西欧近代の天文学を解釈しようとした劉氏の思考パターンは、清末以来の「付会説」の系譜に位置づけられたのである。しかもパリ大学卒業の劉氏の名は『簡陽県統志』（一九三一年刊）の選挙志に記録されている。選挙志は本来、伝統社会において科挙の合格者を顕彰するチャプターで

あったが、近代の留学生もその延長線上で扱われたわけである。このように中国近代の海外留学は、送り出す社会も送り出される学生もともにその意識の根底に中国文明の母斑を色濃くとどめていた。この越境現象は国境を越えるものではあっても、文明の境界を越えようとすることはなかったといえるかもしれない。



漂流する小説

—△ロビンソン・クルーソー▽の越境

齋藤 希史

一七一九年に出版され、しばしば近代小説の祖として目されるダニエル・デフォー△ロビンソン・クルーソー▽は、それ自身ひとつの越境した人間の物語であると同時に、近代の始まりを告げるテクストとしてさまざまな言語圏で翻訳された、越境するテクストであった。異なる言語・文化への△越境▽によってこの小説は種々の変容を遂げるが、翻訳が単なる言葉の移しかえなどではなく、文化そのものの越境でもあることの典型的な例と言えるだろう。

漂流小説としての△ロビンソン・クルーソー▽は、大航海時代以降の実録的要素の強い航海記を背景に持つ一方で、神話的あるいは宗教的な旅——幾多の困難を伴うまさしく境を越える旅——というモチーフの上に成り立っている。いわば、伝統的な旅のモチーフが近代世界の幕開けとともに容貌を変じた姿をここに見ることができのだが、この旅というモチーフがいかに近代化してゆくかは、それぞれの言語・文化圏によって違いがあり、△ロビンソン・クルーソー▽の翻訳が

さまざまな姿を呈しているのも、ひとつにはそのゆえなのである。

たとえば、日本での△ロビンソン・クルーソー▽の初訳は、黒田麴廬のオランダ語からの重訳△漂流記▽であり、また、中国では遅れること約五十年、一九〇二年に公刊された沈祖芬訳△絶島漂流記▽および時期を同じくして雑誌△大陸報▽に連載された△冒險小説魯敏孫漂流記▽が初訳なのだが（日訳、華訳ともに抄訳）、黒田訳で顕著なのは、冒険者・開拓者としてのロビンソンの英雄化であり、開化意識である。物語も第一部の孤島での生活に重点が置かれ、第二部の世界周遊は訳されていない。この傾向は以後も受け継がれ、明治期のほぼ原作に忠実な訳でも、第一部のみを訳出するのが普通であった。一方、中国の初訳は、どちらも第二部までをおおい、力点もむしろ世界周遊に置かれている。ここではロビンソンは、航海によって見聞を広めた先覚者としての役割を振られており、沈訳の序には「以て吾が四萬萬の衆を覺ます」の句が見られるのである。

物語への意味づけは原作と違ったものになり、小説としての形式も変容を余儀なくされてはいるものの、むしろ、こういった、今の我々から見れば△奇妙な▽翻訳作品群こそが、文化もしくは文明の領域における

△越境▽のありようを示しているのではないだろうか。

シンポジウム

「越境する人びと」

横山俊夫

それぞれの報告者から、つぎの三点に的を絞って自説の再論を願ひ、それをふまえて、ともに議論できる課題をさぐってみた。

- (1) 越境とはなにか
- (2) なぜ越境がおきるのか
- (3) 越境により、越境した側・越境された側にとの
のような変化が生じるか

結果として、異民族・異文化間の越境現象がスムーズにゆくばあいの条件とはなにかということに、議論が集中した。まもなく、「異質さ」の度合い、越境後の空間的な住みわけ許容度、越境を余儀なくさせた社会的背景や緊迫度といったものが重要なものとして浮き彫りにされだしたところで、ナントモハヤ時間切れ。

シンポジウムの人数構成や時間について、まだまだ改良の余地ありと反省した次第。

論じ残された問題は多い。たとえば、越境後に、越境者・被越境者の双方に、それぞれの「伝統」なるものへの傾斜が強まる現象、あるいは、双方の当初の予測を越えて、新しい文化がいわば無意識のうちに合作される現象などを、どのような言語でとらえ、どのように評価するかといったことについては、現代の地域主義の台頭や国際化問題との関連も深く、別の機会にあらためてとりあげられることが望まれる。

自作を語る作家たち

——創作法の公開について——

鈴木 啓 司

ジャンルを問わず一つの作品ができあがっていく過程には、興趣尽きないものがある。ましてや、それが作者自身によつて語られるとなると、迫真性の点でも申し分ないものとなる。昨今のテレビ映画界に見られる顕著な傾向として、いわゆるメイキング・オブ・・・と称する、撮影風景をまた別撮りした作品の流行があるが、これなど、我々のそうした舞台裏への好奇心をいたく刺激するものとして、人気を博しているといえる。

しかし、ここで一つ重要な問題提起をすれば、我々がそれらの作品に接する場合、それらをどこまで真正なるドキュメントとして受け取るか、ということである。いやむしろ、作者の側からのこうした積極的な舞台裏公開には、当然そこに作者の様々な思惑が入り込んでいると考えたほうが、自然だろう。我々がこれか

ら扱う作者の自作語りについても、同様の研究姿勢が要請されるのであって、それらは本作品を理解するうえでの補助的資料としてではなく、エクリチュールの一分野として独立に論じられるべきものである。

思えば、自作語りの嚆矢といえるポーの「構成の原理」（一八四六）が、すでに極めて戦略的なエッセイであった。それは、ロマン主義的な熱狂による創造へのアンチテーゼであり、自己の決定論的宇宙観の文学的ヴァリエーションであり、推理小説のクライマックスにも似た秘法の種明しであった。ここに見られる半ば機械的手法による作品創造と、自作語りの持つ文学的「パフォーマンクス性」は、両者相まって、以後、この分野の底流を形作るにいたる。前者は、特にレーモン・ルーセルの『私はいかにしてある種の本を書いたか』（一九三五）、ウリボグループの『ウリボ』（一九七三）などにおいて展開され、後者は、ジッド『贗金造りの日記』（一九二六）、ヴァレリーの自作の詩を回顧した一連のエッセイなどによって実践された。また、最近の傾向として、大量出版状況下に生まれるベストセラーの後続商品という市場的付加価値も、特記しておく必要がある。例えばウンベルト・エーコ『薔薇の名前覚え書き』（一九八三）は、作者の意図とは別にこうした意味合いを認めずにはいられない著

作である。メディアとの新たな関係性のなかで、自作語りは現在、ますます独自の文学行為として成立しつつあるように思える。



端方と二枚の写真

浅原達郎

Kwang-chih Chang (張光直) 氏の *The Archaeology of Ancient China* (4th edition, 1986) の十三頁に、ある銅器群を前に一団の清朝官人たちが並ぶ、一枚の写真が掲載されている。銅器は、光緒二十七年(一九〇一)秋に陝西省宝鸡鬪鷄台より出土して、清末の収集家端方のものとなり、後にニューヨークのメトロポリタン美術館の所蔵に帰した、きわめて有名なセツトである。この写真は青銅器を撮影したものととして最も古いものとおもわれる。一方、銅器の背後に並ぶ二十名ばかりの人物については、張氏は「おそらく端方(一八六一—一九一一)に率いられた一団の清朝官僚たち」というばかりだし、わたしも一見したところで見おぼえのある顔はまったくなかった。その中に端方がいるかどうかさえ判断できなかったのである。ところがその後、勞乃宣と楊鍾羲という二人の端方の幕僚がそこに写っていることに気づいた。楊はとくに两江総督端方の腹心であり、しかも写真では中央にすえられた銅器の後の向かって左側に立つ。すると、

そのとなり、即ち銅器の右後の人物は、やはり所有者の端方ではないかとおもわれる。端方の他の写真と見くらべても、その男が端方であって差しつかえなさそうである。

勞乃宣と楊鍾羲が同時に端方のもとにいた時期を考証すると、この写真は、光緒三十二年(一九〇六)秋から三十四年(一九〇八)春までの間に、南京で撮影されたものとみられる。端方は两江総督の任にあり、官僚としても収集家としてもその絶頂期にあった。写真にはそのとき端方のもとに集まった名士たちが写っているものとおもわれるが、報告ではそこに繆芸風、李葆恂、陳慶年、況周儀、李詳、李瑞清、夏敬觀といった人々の存在を推定した。ただしそのなかには、ややあぶなっかしい比定もあり、報告の後に疑義や異論を提出された方も少なくなかった。

時間の関係でほとんど触れられなかった、もう一枚の写真は、「青鶴」雑誌第三卷第七期(一九三三)にみえる「三十年前青溪鑑園攝影」で、やはり南京における端方のサロンをしめすもの。こちらはそこに人物の名が記されているうえに、写真にも見える陳三立がそれに題して詩を書いていることもあって、光緒三十四年(一九〇八)春に南京で撮られたものと確認される。

公卿の拳兵と草莽

——赤報隊の結成などをめぐって——

佐々木 克

明治元年一月一〇日、近江の松尾山金剛輪寺（秦荘町）で公卿の綾小路俊実を擁立して、志士・草莽が拳兵、赤報隊が結成された。「志士蜂ノ如く起り、雲ノ如く集ル」者およそ三〇〇名であった。この拳兵は、王政復古クーデター後の、慶応三年二月一二日、公卿の鷲尾隆聚が勤皇の兵を高野山に挙げたことに、刺激されてなされたものであった。

赤報隊の中核をなしていたのは、相楽総三らのグループ、水口藩士油川信近らのグループ、旧新撰組鈴木三樹三郎らのグループの三つであった。相楽総三は以前から綾小路俊実の下に出入りしており、江戸市中擾乱ご京都に舞い戻り、西郷隆盛の命で拳兵に加わったものである。油川信近と綾小路俊実を結び付けたのは、典藥寮医生の山科元行で、山科は鈴木三樹三郎とも面識があった。拳兵計画の中心にあったのが山科元行であったが、その背後には岩倉具視がいた。山科元行は岩倉具視の股肱の臣松尾但馬の兄である。また岩倉具視の腹心である水口の草莽城多董は、油川信近と親友

のあいだがらでもあった。

当初岩倉は、草莽の拳兵を支持し、民心をひきつけるため、年貢半減をも考えていた。しかし一七日頃には、草莽拳兵は不可との方針を明らかにする。そしてさらに二四日には年貢の「半減ト申事ハ不可」と明言するようになる。前者の方向転換は、近畿以西の諸藩の政府支持の姿勢がはっきりしたことにより、草莽の力に頼らなくてもよいと判断したことによる。また年貢に関して言えば、戦費にも事欠いているような状況であったから、明らかに財政上の理由からであった。以上のように、赤報隊の結成後、政府をとりまく状況は大きく変わり、赤報隊の結成に背後でかかわっていた岩倉具視の認識も、転換していたのである。

こうしたなかで、赤報隊は年貢半減をにかけて東山道を進軍していった。また東海道鎮撫総督の指示に従えとの、政府からの指令も無視していた。かくして赤報隊は解散を命じられるのであるが、相楽総三らはなおも信州路へと進み、ついに「偽官軍」として断罪される事になるのである。そして相楽総三らの草莽拳兵を支援した、もう一人の人物である西郷隆盛も、なぜか相楽らに救いの手を、さしのべることはなかった。

おくりもの

・林屋辰三郎名誉教授は、日本学士院会員に選ばれた(二月一四日)

・竹内實名誉教授は、福岡アジア文化賞を受賞(九月三日)

・田中淡助教授は、浜田青陵賞を受賞(九月一九日)

・河野健二名誉教授は、京都市文化功労賞を受賞(二月二五日)

訃報

・今西錦司名誉教授(九〇才)は、六月五日逝去。従三位、勲一等瑞宝賞がおくられた。

人のうごき

・山田慶兒国際日本文化研究センター教授は、併任教授(西洋部)。(比較文化研

究部門、四月一日〜一九九三年三月三一日)

・岸本美緒東京大学助教授は、併任助教授(東方部)。(比較文化研究部門、四月一日〜一九九三年三月三一日)

・岩熊幸男(西洋部)講師は、辞職(三月三一日付)のうえ、福井県立大学教授に転出。

・浅原達郎氏を助教授(東方部)に採用。
・木原史雄氏を助手(東方部)に採用。
・森賀一恵氏を助手(附属東洋学文献センター)に採用(以上四月一日付)。

・辻正博(東方部)助手は、滋賀医科大学医学部助教授に昇任(五月一六日付)
・稲本泰生氏を助手(東方部)に採用(十一月十六日付)。

・荒牧典俊教授(東方部)は、二月二日伊丹発、カリフォルニア大学、中国社会科学院等に於いてセミナー等出席及びインド仏教思想史に関する研究資料蒐集を行い、六月三日帰国。

・山本有造教授(日本部)は、文部省在外

研究員旅費により、三月二〇日成田発、ロンドン大学、フランス・国立文書館、ピサ大学等に於いて「お雇い」鉱山技師エラスマス・H・M・ガワーに関する研究資料蒐集を行い、五月一八日帰国。

・富谷至助教授(東方部)は、三月二三日伊丹発、ケンブリッジ大学、スウェーデン・国立民族学博物館等に於いて海外所蔵の中国出土文字資料の研究及び研究資料蒐集を行い、九月二八日帰国。

・麥谷邦夫助教授(東方部)は、委任経理金により、三月二四日伊丹発、上海社会科学院に於いて三教交渉関係に関する研究資料蒐集を行い、四月一七日帰国。

・狭間直樹教授(東方部)は、四月二四日伊丹発、広東省社会科学院、汕頭大学等に於いて学術交流及び研究資料蒐集を行い、五月七日帰国。

・梅原郁教授(東方部)は、五月二三日成田発、ヴェクトリア・アルバート美術館、ブリテイッシュライブラリー等に於いて学術交流及び研究資料蒐集を行い、六月一日帰国。

・梅原郁教授(東方部)は、七月六日成田発、ギメー博物館、インド美術博物館、

大英博物館等に於いて中国唐・宋時代の法制・社会史に関する研究資料蒐集を行い、八月一日帰国。

・前川和也教授（西洋部）は、委任経理金により、七月一八日伊丹発、大英博物館、イスタンブール考古博物館に於いてシールド・メール粘土板文書に関する研究及び研究資料蒐集を行い、八月二八日帰国。

・谷 泰教授（西洋部）は、七月二九日伊丹発、ミラノ大学、アブルツォ・チェルクエト村に於いてイタリア中部山村での文化人類学に関する研究資料蒐集を行い、九月九日帰国。

・田中 淡助教授（東方面）は、八月九日伊丹発、中国社会科学院、應鼎木塔、独楽寺等に於いて古建築保存修復の実体調査及び研究資料蒐集を行い、八月二三日帰国。

・水野直樹助教授（日本部）は、八月一日伊丹発、スタンフォード大学、ハーバード・エンチン研究所に於いて朝鮮近代史、東アジア関係史に関する研究及び研究資料蒐集を行い、一九九三年八月三十一日帰国予定。

・井狩彌介教授（西洋部）は、委任経理金

により、八月一七日伊丹発、マドラス政府図書館、ムンネーシユヴァラム・ヒンドゥー寺院等に於いてヒンドゥー教写本及びヒンドゥー教儀式に関する調査並びに研究資料蒐集を行い、九月六日帰国。

・宇佐美 齊助教授（西洋部）は、八月二一日伊丹発、フランス国立図書館に於いてフランス近代詩、特にランボーに関する研究資料蒐集を行い、九月二二日帰国。

・齋藤希史助手（日本部）は、八月二八日伊丹発、北京大学に於いて中国文学理論史に関する研修及び研究資料蒐集を行い、一九九三年八月三十一日帰国予定。

・横手 裕助手（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、九月八日成田発、北京白雲觀、天后宮等に於いて中国における道教の現状に関する調査及び研究資料蒐集を行い、十一月六日帰国。

・吉川忠夫教授（東方面）は、九月一七日伊丹発、陝西師範大学、武漢大学に於いて第四回魏晋南北朝史学会出席及び六朝隋唐精神史に関する研究資料蒐集を行い、一〇月二日帰国。

・高田時雄助教授（東方面）は、委任経理金により、九月一七日伊丹発、大英図書

館、フランス・国立図書館、カイロ大学等に於いて中央アジア発現多言語写本に関する研究及び研究資料蒐集を行い、一〇月一六日帰国。

・山室信一助教授（日本部）は、九月二三日伊丹発、上海社会科学院に於いて日中国交二〇周年記念日中国青年研究者会議出席及び研究資料蒐集を行い、九月二八日帰国。

・桑山正進教授（東方面）は、一〇月一日伊丹発、大英博物館、イタリア中東極東協会等に於いてガンダーラ美術考古学会議出席並びにガンダーラ遺物に関する調査及び研究資料蒐集を行い、一〇月二二日帰国。

・谷 泰教授（西洋部）は、一二月二三日成田発、ミラノ大学、マンチェスター大学等に於いてイタリア・サンドリオ周辺での民族学的調査及び研究資料蒐集並びに研究論文発表のための打ち合わせを行い、一九九三年一月一日帰国。

外国人研究員

・陳 高華

中国社会科学院歴史研究所研究員

中国近世(特に元・明時代)の政治と

社会の研究(比較社会客員部門)

受入教官 梅原教授

期間 六月二九日～二月二八日

・Michael Moerman

カリフォルニア大学人類学部教授

社会的相互行為論(日、米、タイ資料

を材料として)の研究(日本学客員部門)

受入教官 谷教授

期間 七月一日～

一九九三年二月一七日

招へい外国人学者

・Susanne Weigelin-Schwiedrzik

ハイデルベルグ大学教授

西洋近代思想の日本経由による中国で

の受容の研究

受入教官 狭間教授

期間 四月九日～五月三十一日

・George Elison インディアナ大学教

授

十七世紀日欧文化交流の研究

受入教官 横山助教授

期間 五月九日～十月二〇日

・鄧 野 中国社会科学院近代史研究所助

理研究員

抗日戦後の国民党支配について

受入教官 狭間教授

期間 九月二六日～十二月二五日

・陳 映芳 華東政法学院大学講師

中国近代文化交流史の研究

受入教官 狭間教授

期間 十月十二日～

一九九三年三月二一日

外国人共同研究者

・Anne-Marie Christin

学教授

日仏におけるテキストとイメージの比

較研究

受入教官 宇佐美助教授

期間 四月一日～五月十日

外国人研修員

・Fabrizio Pregadio イタリア東洋

学研究所研究員

宋代以降の道教「悟真篇」とその註釋

指導教官 吉川教授

期間 四月一日～六月三〇日

外国人研究生

・Daria Berg オックスフォード大学博

士課程学生

醒世姻縁傳と續金瓶梅に描かれたユー

トピア

指導教官 小野教授

期間 四月一日～九月三〇日

・Lowell Dean Skar ペンシルバニア

大学博士課程学生

中国科学と宗教の關係

指導教官 田中淡助教授

期間 四月一日～

一九九三年三月二一日

・Sabine Maria Fruhstuck ウィーン

大学博士課程学生

日本人の身体理解と身体管理

指導教官 富永助教

期間 四月一日～

一九九三年三月三十一日

Franco Catti ナポリ大学研究プロジェクト員

道教文学

指導教官 麥谷助教

期間 五月一日～

一九九三年四月三〇日

林 紅 福建師範大学講師

明清婦女問題

指導教官 小野教授

期間 五月一日～

一九九三年三月三十一日

趙 元玲 カリフォルニア大学博士過程学生

明清における医学と知識の伝承―蘇州の医者達

指導教官 小野教授

期間 十月一日～

一九九三年三月三十一日

東洋学文献センター講習会

一九九二年度漢籍担当職員講習会(漢籍電算処理)

第一日(一〇月五日)

人文科学とデータベース(講演)

大型計算機センター教授 星野 聰

情報ネットワーク(講義)

大型計算機センター助教

金澤正憲

東洋学文献類目の計算機処理(講義)

大型計算機センター技官 河野 典

電字の国際標準化と文字フォント作成法

(講義) 勝村哲也

第二日(一〇月六日)

東洋学文献類目の編纂とフォーマット

(講義) 都築澄子

漢字入力法(講義) 森賀一恵

計算機処理入門(講義)

大型計算機センター技官 隈元榮子

データベースについて(講義)

大型計算機センター助手 河原 稔

データベース検索(一)(実習)

第三日(一〇月七日)

知識情報処理(講義)

大型計算機センター助手 石橋勇人

マルチメディアと言語処理(講義)

大型計算機センター助教

久保正敏

データベース検索(二)(実習)

第四日(一〇月八日)

UNIXとワークステーション(講義)

大型計算機センター助手 安岡考一

漢字コードの話(講義)

大型計算機センター技官 小澤義明

データベース検索(三)(実習)

第五日(一〇月九日)

AIと情報検索(講義)

大型計算機センター助教

大西 淳

大学間ネットワークサービス(講義)

大型計算機センター技官 櫻井恒正

一九九二年度漢籍担当職員講習会(初級)

第一日(一一月三〇日)

漢籍の話(講義)

四部分類等(講義) 梅原 郁

第二日(一二月一日)

経・子部書(講義) 森賀一恵

目録法(講義) 田中久子

第三日 (二月二日)

史部書 (講義)

浅原達郎

実習 (一)

第四日 (二月三日)

新学部 (講義)

滋賀大学教育学部助教授 井波隆一

実習 (二)

第五日 (二月四日)

集部書 (講義)

文学部助教授

実習 (三)

川合康三

教授講演会

ロシアにおける敦煌学と東洋学

。 一二月一七日 於西館会議室

フランス国立人口問題研究所資料部長

エマニエル・トッド氏を囲むセミナー

ヨーロッパの家族構造と政治体質

講演会

。 一二月六日 於本館大会義室

ロシア科学院東洋学研究所メンシコフ

お客さま

一月二〇日 北京市社会科学院副研究員

習 五一

二月一七日 哈爾濱市人民政府地方志辦公室副研究員

六月二三日

国立台湾師範大学歴史系教授

林麗月

二月二五日 中国第一歴史檔案館副館長

関成和

中国社会科学院歴史研究所副所長

周年昌

三月二〇日 イタリア中亜極東協会长

Gherardo Gnoli

徐藝圃

寧夏文物考古研究所長

副研究員

胡一雅

五月八日 上海社会科学院歴史研究所研究員

唐振常

寧夏固原博物館長

助理研究員

王鈺欣

五月二八日 中国社会科学院歴史研究副主編

阮芳紀

寧夏回族自治区文化庁

文物事業管理所副所長

馮漢興

中国社会科学院外事局亜非処

宋徳金

一〇月五日

ソウル大学地域総合研究所長

雷潤澤

五月二九日 北京大学歴史系教授

解莉莉

一〇月九日

香港中文大学中国文化研究所

権泰煥

六月九日 復旦大学歴史系副教授

劉其奎

〃

研究者

金観濤

二月 六日 ロシア科学院東洋研究所教授

L・N・メンシコフ

二月 九日 シンガポール国立大学講師

陳 金樑

二月 七日 プリンストン大学教授

余 英時

二月 八日 広東省社会科学学院研究員

葉 顯恩

二月 一日 カリフォルニア大学歴史学部

助教 王 国斌



「居所」確定の効用

——「居所」班——

藤 井 讓 治

一九九〇年に始めた通称「居所」班の研究テーマは、少々長く、「近世前期における政治的主要人物の居所と行動」というものである。この研究は、日本の近世前期社会において政治的に重要な役割を果たした人物の居所と行動に関する情報を総合的に蓄積し、研究者共有のものとすることを目的としている。

取り上げた人物は、徳川家康・秀忠・家光といった初期の將軍のほか、京都所司代の板倉勝重・重宗、家康の出頭人として知られた大久保長安、「黒衣の宰相」といわれた以心崇伝、茶人としても著名な小堀遠州と小堀政一、淀城主永井尚政、勝龍寺城主永井直清など、主に上方支配にかかわった人々である。三年近くの研究会の積み重ねによって、これらの人物に関する情報は、かなりの蓄積をみている。

そのなかから幾つかを紹介しよう。江戸時代の政治史を研究するものが日常的に利用する『徳川実紀』や『徳川諸家系譜』などの記事に多くの誤りが見付かった。一例を上げれば、『徳川実紀』は、元和五年（一

六一九）十月に秀忠が日光に行ったとする。しかし秋田藩主佐竹義宣の家臣梅津政景の日記の記事から、この時秀忠は日光に行っておらず江戸にいたことが判明する。そうした誤りは、上洛の日時や鷹野の記事にも多く見られる。

二つめは、複数の人物の居所を確定することで、上方支配にあたっていた人物が江戸行きなど任地を離れた時、その機能がいかに補完されたかが明らかになってきたことである。たとえば所司代の板倉重宗が不在の時には淀城主永井尚政が勝龍寺城主永井直清のどちらかが京都に出向き、また小堀政一と五味豊直、大坂町奉行の久貝正俊と曾我古祐の一方が江戸に行く時には必ず他方のものは上方にいたといった具合である。

三つめは、予想していたがこうした人物の動きが極めて活発である点である。小堀政一についてみると、家光が將軍になった寛永九年（一六三二）から約一〇年間に、八度江戸と上方のあいだを往復している。なかでも寛永十九年には、五月に伏見から江戸へ下り、七月に江戸から伏見に戻り、十月にはふたたび江戸に下向している。

こうした研究を通して得られた基礎的情報が、今後の研究のなかでどのように利用され生かされて行くかは不安もあるが期待しているところも大きい。

一九二〇年代の中国と

中国近代史研究

石川 禎 浩

世界史における一九二〇年代が、「戦雲の三〇年代」と対比されるなかで「夢の二〇年代」と称されるように、中国における二〇年代もひとつの夢の時代であった。そこでは街々に石造りの高層建築が建ちはじめ、都市民が映画館に足を運び、マスコミの発達とともに書店には雑誌があふれ、文学で飯を食う人間があらわれた。ストを呼びかける労働運動家、青白い顔をしたマルクスボーイ、好不況の波にもまれて経営に頭を悩ます企業家、いずれもが二〇年代中国をいろどる群像である。二〇年代の中国社会が今日のわれわれにもなじみの深いこれらの事象を有するいわゆる現代性を胚胎しはじめたという見解はわが研究班の共通認識になりつつある。

もちろんその対極には軍閥や変わらざる中国にあえぐ農村社会も厳存するのだが、二〇年代中国の激動を象徴する国民革命（北伐）という戦乱も、社会にただようそうした「夢の時代」を背景としていたことを忘れてはならないだろう。別の言い方をすれば、「革命、

そしてまた革命」あるいは「革命史Ⅱ近代史」という短絡的な近代史研究にたいする見直しは、その革命運動の矮小化や従来「反動」とされてきたものの再評価以外にもあり過ぎるほどであるのである。

いわゆる中国近代史の共同研究班は、二〇世紀初頭を対象にした「辛亥革命の研究」にはじまり、五四運動、民国初年の文化と社会、国民革命とテーマをあらため、いま二五年をこえる歩みののち、ようやく「一九二〇年代の中国」を終えようとしている。じつに、四半世紀あまりをかけて中国二〇世紀の前四半世紀を研究してきたことになる。この間、中国国内における政治情勢の激変や歴史学をとりまく思潮の変化をうけ、近現代関係の資料が驚くべき増加を示したことは紛れもない事実である。新聞、雑誌、統計等々の復刻があいついだことはいうまでもない。たとえば、八〇年代初頭において、日本において目にしうる解放前の中国新聞としては、わずかに京都の『時報』、東京の『順天時報』を数えるのみであったが、今や二〇年代の大新聞だけでも、東北の『盛京時報』、北京の『晨报』、天津の『大公報』、上海に目を移せば『申報』、『民権日報』、南は広州の『広州民国日報』等々のゆうに五指にあまる。実際、もっか人文研の所蔵する解放前の中国新聞はその数からいえば、京大付属図書館が所蔵

する戦前の日本新聞をしのぐにいたったのである。大海のごとき資料がややもすれば個人の処理能力をこえる昨今、組織的な資料消化と互いの情報交換の場としての共同研究班の価値は、増しこそすれ減ずることはないだろう。中国近代班が関西地区における中国近代史研究のセンター的役割をはたしてきた一つの理由もそこにある。



たかが文学、されど文学

大浦 康介

「記号・意味・文学」と銘打った研究班が発足して早や二年日が終わろうとしている。解ったような解らないようなタイトルだが、文学を感性やテーマの問題として捉えるのではなく、言葉や意味の生成のレベルにまでいったん下ろして、例えば日常言語とは異なる文学言語のあり方を問う、というのがその第一の意味である。西洋語では、例えば英語で *sign, signify, signification* と言うように、「記号」「意味」と訳さざるを得ない二語は地つぎの言葉である。記号論が何よりもまず意味のあり方を問う学問であるということが日本語では分かりにくいという事情もまたそこにあるような気がするが、我々の課題はさしあたって文学の記号論的アプローチ及びそれに続く言語学的成果を踏まえつつ、それらをいかに越えるかというところにあると言えるだろう。というのも、構造主義言語学に理論的根柢をおく記号論は、文学言語という対象を、閉じられた差異化の体系としての言語観をベースに、その音韻論的・統辞論的・意味論的特徴を抽出するとい

う形で扱ってきたからである。その後、言語を取り巻きかつ言語内部に痕跡を残す発話状況というものの考慮をきっかけとして、言語のより現実的でダイナミックな把握、インターパーソナルな磁場への移行が強調されるようになり、文学言語はコミュニケーション論の枠内で（コミュニケーション言語の一変型として）考えられるようになった。こうした過程を通じて文学言語がほぼ詩の言語と同一視されたことは想像に難くない。詩的言語こそは伝達を重要な目的とする日常言語から最も距たったものであり、その本質は「何を」ではなく「いかに」語るかにあるからである。詩の要約や翻訳が散文のそれに比べて遙かに難しい所以である。しかし文学は詩的言語に代表される言語的特質の問題に尽きるだろうか。近年特に意識され始めたのは、こうしたアプローチの一面性である。当たり前のことだが、「何を文学と呼ぶべきか」（評価を含んだ文学の質的特性の問題）と「何を人々は文学と呼んできたか」（文学の社会的な存在状態の問題）とは違う。そして我々は後者をなおざりにしてきた（それにはそれなりの理由があるのだが）。フランスのある文学研究者が言ったように、文学とは「同時に幾つものもの」なのである。

旅

上海の秋蟹

山室信一

いったい自分に何ができるというのだろうか——耳を聳せんばかりの大声で次々と述べたてられる日本の対中国政策の歴史と現状に対する非難と不満、それらを前にしてどう答えてみたところで現状をいかほども動かせるわけではない、そんな自らに対して舌打ちしたいような思いを反芻しながら私は自分がそこにいることを少し後悔していた。

「上海にいらっしゃるなら是非、秋に。蟹がおいしいですから。」かねてからそう上海の知人に勧められていたことも、上海社会科学会联合会、国際文化会館などの主催で開かれた日中国交回復二十周年記念シンポジウムでの報告をつい引き受けてしまった心の動きのどこかに作用していたのかもしれない。しかし、それとともに浦东新区開発で大きく変貌する前の上海を一目見て置きたいという思いも強くあった。



新装なった黄浦公園

はたせるかな、上海は大きく動きつつあった。かつて「犬と中国人、入るべからず」の看板があったという黃浦公園は、アメリカのモールさながらのプロムナードに改装され、写真で見ると昔日の面影は全くない。そして、国慶節を控えて、ここから南京路へと人波があふれ、歩くのにも、つま先立ってただ押され行くだけという感じであった。しかも、店々には多様で高価な商品が綺羅を争っている。疑いもなく上海は「社会主義市場経済」の渦中で沸き立っていた。しかし、そこにいるとなにか浮き足立って急かれ行く心もとなさ、流れに身を任せることへの名伏しがたい不安を覚えたことも偽らざる事実である。

ところで、なぜ秋蟹が美味なのか——かつてある中国人にこう尋ねたとき、「それは成長しようとする蟹の身が殻の中でもがいていて脂がのり、肉もしまるからだ」との答えを得たことがある。その真偽のほどは蟹ならぬ身に確かめようもないが、『周礼』に蟹膏などと見え、古来、賞味されてきて持螯賞菊（カニを食べながら菊を観賞すること）が秋の贅ともいわれている以上、経験的に秋が旬であることは間違いないのであろう。

そして、もし秋蟹のおいしさの秘密が、古き殻の中にあつてその殻を突き破らんとばかりにもがくことにあるのなら、現在の上海、いや中国そのものがまさに殻の中で激しく身もだえをし、旬の味を醸し出しているのかも

しれない。その反面、百年の歳月の間に作られた日中関係の殻はいまだ身動きできぬほどに固くおおいかぶさっている。のみならず、国交二十年の歴史がさらに新たな殻を作り出した側面もあり、なおしばらくは鉛を流し込まれるような心持を押し殺しながら日中関係の明日を手探りしていかなければならないのであろう……

そのように思いなして会議を終えた一夕、上海の秋蟹は舌の上にやや泥臭い、ほろ苦さを残して消えていった。



理 髪

富 谷 至

ケンブリッジのバブリックスクール・リース校校での体験を綴った池田潔氏の名著『自由と規律』の中に、実に感動的な箇所がある。

当時、リースの学生が行くべき理髪店は決まっていた。ある日急いでいた著者は、いけないと知りつつ別のすいている店にはいる。そこで隣で散髪している校長にいくわすのである——「まだ貴方には紹介されたことがないのに、突然話かけて失礼だが、私が校長を勤めている学校に、やはり貴方と同じ日本の学生がいてね、もし逢うような序があったら言伝してくれ給え。この店にはリースの学生は来ないことになっている、と。」そして悄然と立ち去ろうとする著者に小声で、「この店は、心附けがいろいろある。これを渡しておき給え。」規則の何たるかを説かれる美しい場面である。

ケンブリッジで暮らし初めて一ヶ月ほど経ち、散髪にいろいろと思った。カレッジで話すと、「アポイントメント、とったの?」「えっ? 予約があるのでですか?」

——そうかアポイントメントの国、散髪もそうか。成程。——

今一つ不安だったのは、注文の付け方であった。折しも、わが山本有造先生がケンブリッジにやってきた。

「どういのですか? ミディアムカットですか?」

「あほか、ステーキの焼き具合でもあるまいに。トリムって言うんだ、そういう場合は。」

制度・言語両面で準備万端、さて理髪店へと出かけて行った。「予約をとりたいたいのですが」「うちは予約は要らないよ」「えっ?」「そこで座って待ってて。すぐ番がまわるから」

かなり混んでいるのに、なぜか次々にはけていく。ふと横を見ると、一つ前の男、四月の寒空にランニング一枚。「馬鹿な奴、西洋人はすぐに肌を露出したがる」。やがて、自分の番がまわってきて、何故回転がよいのか、何故ランニングなのがよく解った。たしかにトリム、じよきじよき切るだけで、わずか十五分で終了。しかも切った髪の毛が背中に入って気持ち悪く、不愉快このうえない。一刻も早く帰ってシャワーをあげたい。

私だけ、あの店だけかと思ひ、後日、息子達を別の店に連れていきためてみた。結果、散々文句を言われ、ソフトクリームをおごらされ、タクシーで帰る羽目となつた。

私の英国生活、「イギリスは愉快だ」そのものだった。たった一つを除いて。九月末、ヒースローターミナル4から後ろ髪を引かれる気持ちで帰国の途についた。帰ったらすぐに髪を切りに行こうと思いつながら。

未だに解らない。リースの校長や学生は、平気だったのだろうか? 『イギリスは愉快だ』の先生は、散髪も愉快だったのだろうか?

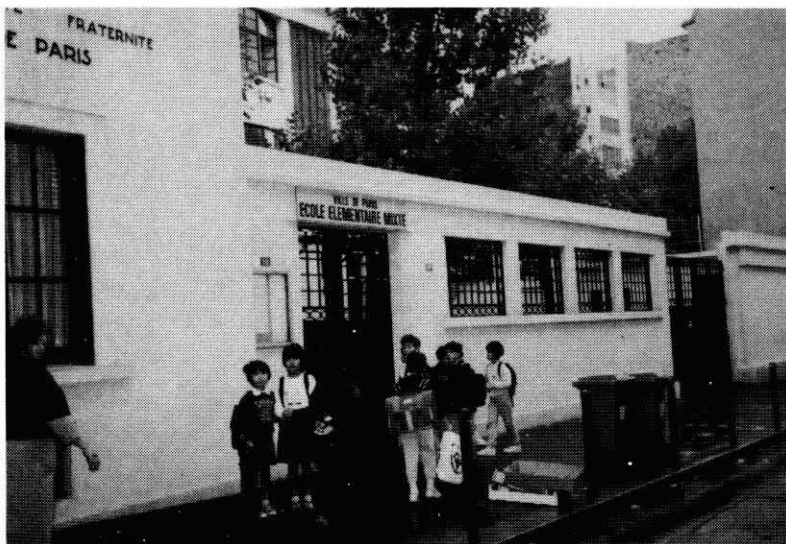


ある街路の話

富永茂樹

もしまたパリで暮らす機会があれば、通りの名前をよく考えて住まいをさがそう。デュ・ソムラール街一番地のアパルトマンで暮らしての感想である。引越しの直後に洗濯機が故障した。この町で修理屋を呼ぶのが大変なのは周知のとおり。「すぐにうかがう」という返事から四、五日してやっと電話があり、もう一度住所を教えてくれという。「いつ来てくれるのか。」——「今夜中に。」翌日の午後になってまた「地図で見つからないが、どのあたりか。」ひよっとすると一晩中さがしていたのだろうか……ともかくやっと到着した修理屋は、ソムラールならぬフォムラールをさがしていたのだった。

SをFと聞きとられたのはなさけないが、ともかくややこしい地名である。これは人名に由来しているので、地図の索引ではデュでひかなくてはならないが、ついでと間違われやすい。うまく言おうとすると、かえってよけいに吃ってしまうし、文字で書いてもたいてい見落とされる。子供が学校に通いだしてからは、デュ・ソムラー



デュ・ソムラールと同じく言いにくい、ロラン街の小学校（撮影・村上節子）

ル街に住んでロラン街（これもまた発音しにくい）までいくという、さらに複雑でめんどうなことになった。昔一年余りボナバルト街にいて、これはだれにでもわかる簡単な地名で何の苦勞もなかったのだが、ダゲール街も、マリユス街も簡単だったろう。

しかし、あまり知られていないはずの名前だが、その後「D・U・シルヴィーのS……」と丁寧に説明しなくてもすぐにわかる人も少なくはなかった。そしてそれは二とおりあった。一つは同じカルチエの住人で、これは当然。もう一つは私と同年輩の同業者のほとんどが皆なが知っているのだ。そのうちの一人がたまたま家に遊びに来て、理由がわからないにわかった。ここは学生のおきには絶対に近寄らないところだったという。当時いつも機動隊が待機していたのであるらしい。なるほど、大学のすぐ近くでしかも大通りからは見えにくい。ある意味ではごく有名な場所だったのだ。

ところで、限られた人間しか知ってなくて発音するのにもむずかしい、このデュ・ソムラール氏とはいったいだれでしょう。ジャック・イレレ編の『パリの街路の歴史辞典』をひくと、一九世紀前半の会計院の高級官吏で、長年にわたり集めた考古学関係のコレクションがクリュニー美術館の発端となった。そして息子はその初代の学芸員……とある。そういえばサンジェルマン大通りとエ

コール街のあいだを並行して走る、このけっして長くない街路は、五区の警察署の傍からはじまり、美術館の東側の壁で終わっているのだった。



書いたもの一覧 一九九二年一月—一九九二年二月(五十音順) ●単行本)

飛鳥井 雅道

●坂本龍馬

福武書店 三月

ジャーナリズム精神の根源(『二六新報』複製版パンフ)

不二出版 五月

岩波書店 七月

●鹿鳴館

龍馬と陸奥宗光(『坂本龍馬・男の生き方』所収)

新人物往来社 九月

文 二九号 一〇月

柔かい精神

稲本 泰生

龍門賓陽中洞考 研究紀要一二号

京都大学文学部美学美術史学研究室 三月

荒牧 典俊

自然破壊から自然再生へ——歴史の轉日について——

出会い 第十一卷第一號 六月

宇佐美 齊

永生と孤立(『現代詩手帖・特集版——ランボオ、一〇二年』)

思潮社 一月

石川 禎浩

マルクス主義の伝播と中国共産党の結成 狭間直樹編『中国

国民革命の研究』 京都大学人文科学研究所 三月

辛亥革命八〇周年記念国際会議学術討論会(武漢) 参加記

近きにおいて 二一号 五月

中国社会主義の「学校」は日本に 朝日新聞夕刊 七月

●金沖及主編『周恩来伝』上、中(共訳) 阿吡社 八、九月

陳望道訳『共産党宣言』について 颯風 二七号 八月

稲葉 穰

書評・桑山正進著『カービシーIIガンダラー史研究』

オリエンツ 三四卷一—号 一月

七〇八世紀ザープリスターンの三人の王

西南アジア研究 三五号 五月

演戯と変身——恋愛書簡の磁場——

ロマン主義の余白に(ドイツ・ロマン派全集別巻II『ドイツ・

ロマン派詩集』月報二二) 国書刊行会 三月

書評・シャルル・ソルリエ著『わが師シャガール』

産経新聞 四月

瞬間の輝きと生の充溢(『小川国夫全集』第一卷月報)

小沢書店 四月

書評・辻征夫著『かたんな混沌』

現代詩手帖 四月

書評・『クワジームド詩集』

産経新聞 八月

● 詩人の変奏

小沢書店 九月

私語りと変奏——「ことばの錬金術」をめぐる——

文学（秋季号）一〇月

● アルベール・メッサン版『アルチュール・ランボー詩集』

（八巨匠たちの自筆原稿叢書）訳詩篇・解題付）

臨川書店 一二月

梅原 郁

● 宋史刑法志 譯注稿（上）

東方学報 六十四 三月

大浦 康介

Narrateur e(s)t personnage ◇◇, Zinbun No.25 三月

中上健次とフランス 京都新聞 一〇月

落合 弘樹

書評・姜範錫著『明治十四年の政変』

明治維新史学会報 二〇号 四月

小野 和子

五四時期家族論の背景 『五四運動の研究』第五の一冊

同朋舎 一月

明代の党争 『中世史講座』八中世の政治と戦争

学生社 三月

浙江学刊 一九九二年二期 三月

論留書 孫文が南方熊楠に贈った『原君原医』について

孫文研究 一四 一〇月

壬辰倭乱と明国

青丘 一四 一二月

岸本 美緒

The "Seventy-percent Cash (Chi-chechien 七折銭)"

Custom of the Mid-Ching Period, *Memories of the*

Research Department of the Toyo Bunko No.49 三月

書評・Joseph Esherick and Mary Rankin eds., *Chinese*

Local Elites and Patterns of Dominance

東洋史学研究 五〇巻四号 三月

国立国会図書館蔵『河南錢糧冊』について 『清朝と東アジ

ア神田信夫先生古希記念論集』 山川出版社 四月

明清期の社会組織と社会変容 社会経済史学会編『社会経済

史学の課題と展望』 有斐閣 四月

歴史理論（一九九一年の歴史学界—回顧と展望—）

史学雑誌 一〇一編五号 五月

清初上海的審判与調解—以『歷年記』為例— 『近代家族

与政治比較歴史論文集』 中央研究院近代史研究所 六月

清代物価史研究的現状 『明国以来国史研究的回顧与展望研

討会論文集』 台湾大学出版組 六月

桑山正進

L'Inscription du Ganesa de Gardez et la chronologie des Turki-Sahis, *Journal Asiatique*, 279-3/4 (1991)

四月

ガネーシャ神像碑銘にみるカーブル突厥王の編年

西南アジア研究 三五(一九九二) 六月

The Horizon of Begram III and Beyond: A Chronological Interpretation of the Evidence for Monuments in the Kāpisi-Kabul-Ghazni Region, *East and West*, 41-1/4 (1991)

七月

書評 前田耕作『バクトリア王朝の興亡——ヘレニズムと仏教の交流の原点』(第三文明社レグルス文庫一九八)

月刊しにか 一九九二年第三卷第八号 八月

●慧超往五天竺國傳研究(編著)

京都大学人文科学研究所 七月

小南一郎

尋葉から存思へ——神仙思想と道教信仰との間

吉川忠夫編 『中国古道教研究』(同朋舎出版 二月)

天命と徳

中国の年中行事——帝王の歳時記から都市の歳時記へ

横山・藤井編 『安定期社会における人生の諸相——年中行事』

(京都府立ゼミナールハウス)

六月

齋藤希史

〈小説〉の冒険——政治小説とその華訳をめぐる

人文学報 六九号 一二月

阪上 孝

フランス革命における知識と秩序 人文学報 七〇号 三月

パブルの原型 創造する市民 三三号 一〇月

佐々木 克

大久保利通文書 『日本近代思想体系別巻』 岩波書店 四月

戦争と平和 ステップ&ジャンプ NHK 八月

●日本近代の出版(日本の歴史一七) 集英社 一〇月

佐々木 博光

出自神話でみるドイツ史 人文学報 七一号 一二月

鈴木 啓司

Essai sur Josephin Peladan III

—La décadence et l'occultisme—, *Zinbun* No.26

三月

●翻訳『ボードレール——詩の現代性』(ドミニック・ランセ著) クセージュ文庫) 白水社 五月

曾布川 寛

上海博物館 中国・美の名宝(編著)

日本放送出版協会 一月

唐代龍門石寶造像的研究(顏娟英訳)

芸術学 七・八期 三・九月

高田 時 雄

漢字音について 『角川大字源』附録 角川書店 二月

音と訓のあいだ 国語科通信 八二号 三月

慧超『往五天竺國傳』の言語と敦煌寫本の性格

桑山正進編 『慧超往五天竺國傳研究』 京都大学人文科学研究所 三月

レニングラードにあるチベット文字転写法華教専門品(續)

内陸アジア言語の研究 七号 五月

漢字導入における南北

溝口雄三他編 『漢字文化圏の歴史と未来』

大修館書店 一月

田 中 淡

● 中國科学史国際会議：一九八七京都シンポジウム報告書

(共編) 京都大学人文科学研究所 三月

古代中国の狩獵—捕獲動物の種類と狩獵方法の類型—

小山修三編 『狩獵と漁労—日本文化の源流をさぐる』

雄山閣出版 四月

弥生建築再考—唐古遺跡絵画土器をめぐる—

西日本新聞 五月二四日

論文解説・フランソワーズ・サパン「一四世紀中華帝国における宮廷料理—忽思慧『飲膳正要』の調理の諸相—」

WESTA 一二号 味の素食の文化センター 七月

中国皇帝の別荘—離宮・苑囿 『山海人居—住まいの文化誌—』

ミサワホーム総合文化研究所 八月

玉座の空間 家具言語 創刊号・特集「玉座」

天童木工 九月

Early Japanese Horticultural Treatises and Pure Land Buddhist Style: *Schuteiki* and Its Background in Ancient China and Japan

John Dixon Hunt (ed.), *Garden History: Issues, Approaches, Methods*

Dunbarton Oaks Research Library and Collection

九月

田 中 雅 一

人間・

民族誌における時間 『けいはんなマラソンセミナー』

生物・時間 (田中雅一・横山俊夫編)

けいはんな 一月

東南アジアの精霊祭祀

南インドのブラーマン司祭たち 京都新聞夕刊 一月

日印文化三三周年記念論集 一月

東南アジアの民衆宗教(上)(中)(下) 中外日報 三月
スリランカ浮田典良・大林太良監修『世界の国ぐに大百科』

第1巻

オメガ社 三月

儀礼的暴力の研究班(共同研究班報告) 人文三八号 三月

南インドの寺院政策 宗教研究 二九一号 三月

展望国際シンポジウム「東南アジアの精霊祭祀—民衆知識のダイナミズム」 宗教研究 二九二号 六月

● Patrons, Devotees and Goddesses: Ritual and Power among the Tamil Fishermen of Sri Lanka (Kyoto University)

Institute for Research in Humanities, Kyoto University) 六月

年中行事の重層性—スリランカ、タミル漁村における祭祀を

中心に 横山俊夫、藤井讓治編『安定期社会における人生

の諸相—年中行事』京都府立ゼミナルハウス 六月

漁業儀礼論再考—スリランカ・タミル漁村における地引網漁

業をめぐる『文化人類学的彷徨—杉山晃一先生還暦記

念文集』(私家版) 六月

女神研究への視座—北米の女神崇拜運動をめぐる

民博通信 57号 七月

インドの神々のイメージ 月刊生活文化 135号 九月

インドの神々のイメージ(二) 月刊生活文化 136号 一〇月

谷 泰

故藤岡喜愛さんの思考の過程 民族学研究 五七一—号 六月
岩は転がりだしたか—今西錦司の死に臨んで— 京都大学新聞 八月

宗教と科学—分岐の界面を探る

河合・清水・谷・中村編『宗教と科学の対話』

岩波書店 九月

家畜と家僕—去勢牡誘導羊の地理的分布とその意味

人文学報 七一号 一二月

塚本 明

江戸の節季規制と都市の年中行事

横山俊夫・藤井讓治編『安定期社会における人生の諸相—

年中行事—』

京都府立ゼミナルハウス 六月

礪波 護

法琳の事蹟にみる唐初の仏教・道教と国家

吉川忠夫編『中国古道教史研究』 同朋舎出版 二月

八尾高旧校舎で学んだ思い出

『大阪府立八尾高等学校旧校舎の調査記録』

大阪府建築部宮繕室 三月

● 中国上 地域からの世界史 2

唐代の畿内と京城四面関

朝日新聞社 五月

唐代史研究会編『中国の都市と農村』 汲古書院 七月
隋的貌閱与唐初食実封

劉俊文主編『日本学者研究中国史論著選訳第四卷六朝隋唐』

中華書局 七月

唐代的県尉 同右 中華書局 七月

桑原隲藏 江上波夫『東洋学の系譜』 大修館書店 一月

孔目司帖 『旅順博物館所藏品展—幻の西域コレクション』

京都文化博物館・京都新聞社 一月

キジル発見の官文書 京都新聞社夕刊 一月二日

富永茂樹

徳と効用のあいだーフランス革命期における科学と芸術

人文学報 七〇号 三月

書評・厚東洋輔著『社会認識と想像力』

ソシオロジ 一一五号 一月

専門職としての文化行政職員

『文化行政・再考』 C・D・I 一月

富谷至

日本の木簡と中国の木簡

書道研究 四九 一月

●本朝度量権衡攷? (校注)

平凡社 東洋文庫 三月

王杖十簡 東方学報 六四冊 三月

狭間直樹

●総索引(共著) 京都大学人文科学研究所共同研究報告『五

四運動の研究』第五函 第一八分册 同朋舎 一月

●中国国民改革の研究(編著)

京都大学人文科学研究所 三月

●周恩来伝 上卷(監訳)

阿吽社 八月

●原本復刻版 民声(編刊)

朋友書店 一月

●周恩来伝 中卷(監訳) 阿吽社 一月

論争年表:一九一—一九一九年 竹内実編『中国近現代論争年表 一八九五—一九八九』 同朋舎 一月

藤井謙治

●福井県史 資料編7(共編)

福井県 三月

●小浜市史 通史編上卷(共編)

小浜市 三月

●江戸開幕

集英社 五月

アジアにおける官僚制と軍隊 『アジアの中の日本史』¹ 1 東京大学出版会 五月

●安定期社会における人生の諸相—年中行事—(横山俊夫氏と共編)

京都府立ゼミナールハウス 六月

一九八〇年前後の戸田さん 『戸田芳實の道』 七月

紹介『京都冷水町文書』第1巻・第2巻 史学雑誌 一〇一—七 七月

藤田 隆則

能空間における歩行が意味するもの ライフサイエンス 二月
書評・正高信男著『ことばの誕生』

日本動物行動学会ニュースレター 六月

古屋 哲夫

満州国人事法令年表——大同元年—康德二年

京都大学人文科学研究所・山本研究室 三月

前川 和也

ウル第三王朝時代ギルスにおける耕地片・耕地ユニットの形
状『藤本勝次先生、加藤一朗先生古稀記念・中近東文化史
論叢』

関西大学 三月

"The agricultural texts of Ur III Lagash of the British Museum (VIII)" *Acta Sumerologica* 14 (1992).

"The shape and orientation of the domain units in the "round tablets" of Ur III Girsu. A critical review of Liverani, "The shape of Neo-Sumerian fields, BSA 5 (1990), pp. 147-186, esp. pp. 155 ff." *Acta Sumerologica* 14 (1992).

水野 直樹

朝鮮人への補償——もう一つの視点 朝日新聞 二月二五日
東方被圧民族連合会(一九二五—一九二七)について

【中国国民革命の研究】(京都大学人文科学研究所研究報

告) 三月

呂運亨と中国国民革命——中国国民党二全大会における演説を
めぐって—— 朝鮮民族運動史研究 八号 四月

(民族運動史上の人物) 李鍾 同前 四月

朝鮮総督府の「内地」渡航管理政策——一九二〇年代の労働者
募集取締—— 在日朝鮮人史研究 二二号 九月

解説(「徐君兄弟を救うために・会報合本」) 影書房 一〇月

光 永 雅 明

The English Positivists and Japan

Zinbun No.26 三月

麥 谷 邦 夫

『大洞真教三十九章』をめぐって

『中国古道教史研究』 二月

道教の世界観 S K A T E 三研究会講演録 一二月

森 時 彦

●五四運動の研究総索引(共編 京都大学人文科学研究所研究
報告)

同朋舎出版 一月

中国紡績業再編期における市場構造——湖南第一紗廠を事例として 狭間直樹編『中国国民革命の研究』

人文学報 七十一号 一二月

京都大学人文科学研究所 三月

山田慶兒

●周恩来伝 一八九八一—一九四二 上巻 (共訳) 阿吡社 八月

日中国交正常化と周恩来 上・下 京都新聞 一〇月

「ニードラム—その創造の源泉」

●周恩来伝 一八九八一—一九四二 中巻 (共訳) 阿吡社 一〇月

学会報告・辛亥革命八〇周年記念国際学術討論会 (武昌) 孫文研究 一四号 一〇月

●「中国科学史国際会議・一九八七京都シンポジウム報告書」 (田中淡との共編) 京都大学人文科学研究所 三月

●中国近現代論争年表 一八九五—一九八九 (竹内実編) 京都大学人文科学研究所研究報告 分担執筆) 同朋舎出版 一二月

安 富 歩

Anatomies in Ancient China, Chinese Science, vol. 10, 15 July 1992

満洲中央銀行の資金創出・資金投入メカニズム 人文学報 六九号 一二月

貨幣と選択権 (共著) 経済評論 一一月

山下正男

ヨーロッパ哲学の困った癖について 人文学報 六九号 一二月

●翻訳「ライブニッツ著作集」中国学 工作舎 一二月

自然言語に災いされたヨーロッパ哲学

山室信一

知の回廊—近代世界における思想連鎖の—前提— 知のフロ

ンティア叢書2 『近代日本の意味を問う』 木鐸社 三月

策作麟祥と河津祐之—ふたりの初代校長—

法政大学大学史資料委員会編『法律学の夜明けと法政大学』

「法令全書と法規分類大全」および「大政官日誌と官報」

法政大学 三月

夜鳴之鳥 劉俊文主編『日本学者研究中国史論著選譯』第十

卷・科学技術 中華書局 七月

模式・認識・製造 同右

技術与人

吳之靜主編『天・地・人』 科学普及出版社 九月

中医学的歴史与理論

『日本近代思想大系・別巻・近代史料解説』 岩波書店 四月
「英国探索」 「仏英行」 「暁窓日録」 「渡米日録」 「洪沢栄
一滞仏日記」 『新版 日本思想史文献解題』 角川書店 七月

山本有造

●日本植民地経済史研究

名古屋大学出版会 二月

●「満洲」関係経済文献目録（溝口敏行・松本俊郎・高橋益代
各氏と共編） 京都大学人文科学研究所・山本研究室 三月
円と元―近代幣制史にみる日中文化交流の一齣― 国立台
湾大学日本総合研究中心編「中日文化差異検討会論文集」
三月

堀江保蔵先生を偲ぶ

経済論叢

一四八巻 四・五・六号 一〇・一一・一二月

私の集書旅行

岩波講座『近代日本と植民地』第二巻・月報 一二月

横手 裕

看話と内丹―宋元時代における仏教・道教交渉の一側面―

思想 八一四号 四月

横山俊夫

「諸道」の時代（中・下） ゼミ友の会だより 四六・四七
号 京都府立ゼミナールハウス 一月一日、三月一日

故吉田光邦先生の御蔵書ならびに収集品の維持・発展を願う

て（共編・吉田コレクション）思案会より京都府知事宛提出）

一月八日

京都大学国際交流会館主事制度をめぐる諸問題ならびにその
改善の方途について（共編・同主事制度に関する諸問題
検討小委員会より京都大学国際交流会館委員長宛提出）

二月二日

一筆啓上

会誌 三九号

（財）竹中育英会 二月

校訂・吉田光邦「技術史の東西」『琉球大学移転完了記念講
演集』 琉球大学庶務部 二月

法の比較文化史を求めて（梅棹忠夫・河上倫逸・杉田繁治各
氏と対談） 比較法史学会編『比較法史研究の課題』
未来社 三月

文化首都の研究（下）

「NIRA研究報告書」No. 910004（コメンテーター・
討論参加） 総合研究開発機構 三月

校訂・吉田光邦「世界の博物館の現状と課題」上田篤編『都
市のミューズランド』 学芸出版社 五月

日本にとっていまなぜ英国か（五百旗頭真・中西輝政各氏と
対談） 中央公論 六月

画像処理による節用集（日用百科書）の使用実態の分析（小
島三弘・杉田繁治各氏と共同執筆）「情報処理学会研究報
告」九二巻四五号 情報処理学会 六月

●視覚の一九世紀―人間・技術・文明―（編著 京都大学人文
科学研究所研究報告） 思文閣出版 六月

科学研究所研究報告）

内なる国際化（小谷隆一・アンドレ・プリユネ・岩井郁子各氏と対談）

一九九一—九二年度国際ロータリー第二六五〇地区第三組
インターシティ・ミーティング報告書

京都北ロータリークラブ 六月

●安定期社会における人生の諸相—年中行事—（藤井讓治氏と共編）

京都府立ゼミナールハウス 六月

布袋尊 横田妙子編『立誠愛業』 京都・私家版 八月

安定社会にゆらぐ年中行事 毎日新聞 七月二三日

監修・Wasen: Japanese-style Ships, Product of Fine Woodworking Technology in an Island Nation, *Sumitomo Quarterly*, No.50. 一〇月

日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について

「日本語学論説資料」二十七号、第一分冊論説資料保存会 一〇月

礼儀作法学園としての鎖国日本

「ON THE LINE」五巻七号 国際電電広報室 一二月

監修・Cha no Yu - Hospitality as an Indoor Performing Art, *Sumitomo Quarterly*, No.51.

ジャパンフェスティバル一九九一の意義（鹿取泰衛・佐波正一・山崎敏夫各氏と対談）

年表・近代日英文化交流の歩み（抄）

英国ジャパンフェスティバル一九九一視察・調査報告書

「ジャパンフェスティバル一九九一報告書」

国際交流基金 一二月

けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」—初会合の記録（田中雅一氏と共編） けいはんな 一二月

吉川 忠夫

編著『中国古道教史研究』（京都大学人文科学研究所研究報告・序） 同朋舎出版 二月

日中無影—尸解仙考— 『中国古道教史研究』 同朋舎出版 二月

師の徳（『宮崎市定全集』2月報） 岩波書店 三月

裴休伝—唐代の一士大夫と仙教—

東方学報 六四冊 三月

推薦文・定本『中国仏教史』

解説・井波律子著『読切り三国志』（ちくま文庫） 柏書房 九月

六朝隋唐時代における宗教の風景 中国史学 二号 一〇月

解説・内藤湖南著『支那史学史』（東洋文庫） 平凡社 一二月

書評・大淵忍爾著『初期の道教—道教史の研究其の一—』

東方宗教 八〇号 一二月

「中外日報」社説 二四回 一—二月

おもしろく読んだ本

藤田隆則

堂本正樹『中世芸能人の思想』角川書店

人

文

第三九号

一九九三年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

(株)田中プリント

非売品